

超低温における固体³He

講師 大阪市大・理 信 貴 豊一郎

この講義の参加者は30～40名程であったが、内容が低温物性のごく限られた範囲で派手さもなく、また同ワクに人気の講義があったことを考えれば、なかなかの盛況であったといえよう。

内容は、固体³Heの物性はもちろんであるが、超低温そのものにも力点が置かれており、特に超低温到達への実験のテクニック等がわかりやすく示されていた。また、固体³Heの研究の発端から現在に至る流れが概観できて、低温になじみのない人たちにも興味深い話であったと思う。先生は実験系の研究室なので、実際実験を行う過程で生じる様々な問題点や、その解決法を具体的に話されていて、その点実験にたずさわっている院生には大変参考になったことであろう。

全体的には、M1にもわかりやすく、内容も豊富で非常に魅力ある講義であった。

(文責 笹山浩二)

高分子系のスケーリング則

講師 東工大・工 野 瀬 卓 平

高分子物理学は、長鎖状分子の物理として他の物性物理学と比べ特殊な分野の観があったが、最近になって他分野からの理論の導入が盛んになってきた。その一例として、臨界現象の分野で発展してきたスケーリング則の高分子系への適用が行なわれており、高分子科学に大きな影響を与えてきた。本年度の夏の学校では、高分子物理の全体講義として、野瀬先生をお迎えし、スケーリング則の基礎的なことから始め、静的スケーリング則、動的スケーリング則について、先生御自身による実験データなどをまじえながら、お話しいただいた。

講義は、7月23日、24日の2日間にわたって行なわれ、約30名の参加者があった。その中には、高分子物理が専門でない人も多く、この機会に高分子にも興味を持っていただけたことと思う。先生が講義の始めに言われたように、高分子物理は、他の物性物理から理論・成果を輸入し、応用することに成功してきたが、高分子物理から育って他の物性物理に輸出できるようなものがあまりない、というのが現状であろう。果して、これがどこまで変り得るかとい